



吉岡によると展示方法のマジックで良く見えるのではなく、作品自体から発せられる雰囲気空間を創り上げているという。

確かに中山の作品は、予定調和的な具象では語り得ない何かがある。中山は阿咩像やベルニーニのような圧倒される具象を好むが、そこにアカデミックな具象と中山が理想とする具象の隔ての鍵がある。同時に我々もまた、彫刻の本来のあり方と日本の美術界のシステムとの相異に注意を払わなければならない。創作や作品がシステムに吸収されるのではなく、我々の視線が制度を自

中山竜輔は1994年東京生まれ、東京造形大学造形学部美術学科彫刻3年在学中である。初個展がステップスギャラリーとなった。

中山は今回、画廊入口に四種類の大きさの小品《絶望くん》(FRP)を14体、画廊内に《女の首》(FRP)《女の首》(ブロンズ)《Instinctive Eros》(FRP)《死への手向け》(Water clay)の四点を展示した。

中山は、チャンスがあれば個展をやりたいと常に思っていた。縁がありステップスで行うこととなった。学部在学中で教授陣に反対は無かったのかと問うと、無くはなかったと答えた。

展示された作品群は、大学の課題作品であることは明らかだ。しかし展示方法によって空間性が強調され、単なる具象彫刻の枠を超えている。ギャラリーのオーナー

ら生み出していく可能性を否定できないのだ。

中山は今後、団体展にも応募していくのであろう。しかしそれは決して現代美術に対する「裏切り」にはならない。現代美術はあらゆる権威を破棄するのだから、全ての事象を甘受し、受難しても乗り越える力を携えている。

重要なのは、中山の貪欲な意思と決意である。無鉄砲、無計画であっても前進を続けること。この姿勢は、若手ではなく我々が思い起こす必要があるのではないだろうか。

